

「希望～“sharp silence(鋭い沈黙)”を越えて」

ヘブライ人への手紙 11章1節

聖学院大学 欧米文化学科准教授 島田 由紀

今日は初めに、私のアメリカ留学時代の友人のことを、お話ししたいと思います。彼は、Buriというケニアから来た学生で、とても陽気な青年でした。私は実際に彼に会う1週間も前から、彼のことを他の人たちからいろいろと聞いていました。私たちは寮に住んでいたのですが、寮ではフロアごとに一つ、洗面所とバスルームがあり、フロアの学生がシェアしていました。Buri は寮に到着したその日から、部屋でもバスルームでも陽気な歌声をあげて、みんなの注目人物になっていました。特に、ケニアの讚美歌をバスルームで歌うと、Buri の太く美しい歌声はフロアいっぱいに響き、フロアの男子学生たちはみんな、思わず微笑んでしまったそうです。

実際に会った Buri は、噂通り、陽気さでいっぱいの人でした。寮の食堂でほぼ毎日顔を合わせ、よく一緒に食事をしたのですが、Buri が鼻歌を歌いながら入り口から入ってくるだけで、疲れた心がパツと明るく軽くなるように感じましたし、Buri との食事は爆笑に次ぐ爆笑でした。

たとえば、Buri の母国ケニアでは、「明日午後二時に会おう」という表現があるそうです。でも、午後二時には誰もやってきません。三時、四時、誰も来ません。五時ごろ、ぼつりぼつりと人が来始めます。午後七時ごろ、ようやくまとまって人が集まってくる—そんな話をしてくれました。ですから、Buri と待ち合わせの約束をするときは皆、「ケニア時間じゃなくて、アメリカ時間で午後二時だからね」と念押しをしていました。

また、こんな話もしてくれました。ケニアにはたくさんの自然公園があり野生の動物がいることで知られていますが、Buri によると、「象っていうのは困ったやつらで、人と目が合うと、必ず踏みつぶしに走ってくるんだ」ということです。「えー、何かそういう事故があったの？」と聞いても、笑って「あいつら、ホントにすごいんだ」と言うだけです。また、こんなことも言っていました。「自然公園で夜、テントを張って寝ていると、外にチーターか何かの息遣いが、いくつも聞こえるんだ。そういうときは、絶対に動かず息をひそめているんだ。じっとしていると大丈夫だけど、少しでも動いたらおしまいなんだ」。みんなが目を丸くして、口々に「本当に、そんな経験したの?!」と聞いても、笑っているだけです。

そんな Buri でしたが、あるとき、「ユキ、映画を見に行こう」と誘われました。私たちは二人とも留学生で車を持っていませんでしたので、寮から歩いていける町の小さな映画館に、連れ立って行きました。学期期間中は、英語での授業についていく勉強で精一杯で、週末に町のカフェに行ったりするのがささやかな息抜きでしたので、映画を見に行くことそのものが楽しみで、どんな映画なのかは行くまで気にかけていませんでしたが、映画は『ホテル・ルワンダ』という題名でした。

この映画は、ルワンダというアフリカの国で、1994 年に実際に起こった実話をもとに製作された映

画です。アフリカの多くの国がそうであるように、ルワンダには、いくつかの異なる部族が住んでいます。また、アフリカの多くの国がかつてはヨーロッパによって植民地化されたように、ルワンダも、おもにベルギーによって植民地とされたそうです。そして、ヨーロッパ諸国は、アフリカでの植民地支配を容易に行なうために、時には、現地の部族間の対立を利用していました。

このような歴史的な背景のなか、1994年、フツ族という部族が権力を握ったルワンダの政府は、自分たちに対立するグループ、特にツチ族への憎しみを煽る宣伝を行ない、それに乗ったフツ族の市民が、手に武器を取りツチ族の市民を虐殺した、という事件が起こりました。約3ヶ月という短い期間に、50万人から100万人ともいう、恐ろしい数の一般市民が、軍隊にではなく、同じ市民の手によって虐殺された、ということです。映画は、ホテルの支配人であったポールという人物が、自分のホテルに虐殺を逃れてきた人々1000人以上を匿い、国連などの支援を得て国外に脱出させた、という物語です。映画の中でのワンシーンは、今でも恐怖を持って思い出します。昨日まで同じ通りに平和に暮らしていた隣人が、「あいつらはゴキブリだ！」という政府の放送を聴いて、鎌や包丁を手にとって、家々を襲って回り、血だらけになりながら次の標的を探している、というのです。

映画を見終わった後、Buriと私は、重い気持ちで黙って歩いていました。Buriが「ちよっとお茶を飲んでいこう」と言い、私たちは小さなカフェに入りました。いつになく、暗い表情のBuriが、ポツリポツリと語りだしました。Buriの母国であるケニアは、ルワンダと直接国境を接しているわけではありませんが、当時、ケニアはルワンダからの難民をたくさん受け入れていたそうです。1994年当時、Buriはケニアの首都ナイロビで大学生だったそうですが、ルワンダからの難民を身近にたくさん見たそうです。そして、「難民のことを迷惑だと思っていた」と言いました。Buriは、母子家庭に育ち、地方の村から首都の大学に出てきており、アルバイトで生活費をまかない、弟や妹のために仕送りもしていました。そのなかで、大勢の難民が押し寄せたために住居費が高くなったことは、Buriにとって、大きな痛手でした。Buriは、沈痛な面持ちで、「あのとき自分は、ルワンダ虐殺のことはニュースで知っていたけれど、自分の身近にいたあの人たちが、どんな経験をし、どんな思いでいるのか、知ろうとも考えようとしなかった」と言いました。

「その人たちは、どんな様子だったの？」と私が尋ねますと、しばらく黙りこんだ後で、Buriは一言、「sharp silence」と言いました。Sharp silence、鋭い沈黙。Buriは、こんなふうに付け加えました。「言いたいことが何もない沈黙じゃない、何かではちきれそうになっている、だけど言えない、そんな沈黙だった」。

Buriとのこんな会話があつて1年ほどして、私は日本に帰国しました。帰国してほどなくして、94年の虐殺事件の直後に、ボランティアでルワンダに行った、という日本人のかたと会う機会がありました。そのかたも、Buriと同じことをおっしゃっていました。「虐殺事件を目の当たりにした人たちは、みんな沈黙していた。ただの沈黙ではなく、一触即発のような、何かが溢れ出そうで、黙っていないと自分を保てないような沈黙だった」。この経験を話してくださったかたは、ご実家がお寺で、仏教系の青年組織を通じてルワンダへ行かれたそうです。「自分は極楽浄土の話がたくさん聞いてきた。お葬式などで自分が話すこともあつた。でも、その意味はよく分かっていなかった。ただ、黙っている、苦しんでいる人

たちを目の前にして、たとえ何十億の世界の向こうであろうと、どんなに遠くて小さくとも、希望がなければ、この人たちは生きていくことはできない、と思った」とおっしゃいました。

この話を聞きながら、私自身は、初めに読み上げていただいた聖書の言葉が、目の前で、稲光に照らしだされるように感じていました。

「信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです」

教会で何度も何度も耳にしてきた聖句でしたが、そのときほど胸に迫ってきたことはありませんでした。人は目に見えるものだけで生きているのではない、私たちはなぜ、目に見えていないものをこそ望むのか、希望とは何か、私が目に見えない神を仰ぎ見ていることの意味、そんなことを考えました。

その後、sharp silence の話を三度(みたび)、違った形で聞くことになりました。

2011 年の東日本大震災から 1 か月が経つか経たないかのころではなかったか、と思います。被災地の様子が流れっぱなしのニュースで、確か、南相馬市、津波の被害がもっともひどかった地域の一つだったかと思いますが、その街で精神科医として働く人が、電話インタビューを受けていました。「地域の人々は病院に来ていますか、どんな様子ですか」とのアナウンサーからの問いに、その精神科医は「人々が病院に来始めています」と答えたとうえで、「病院に来て自分の前に座っても、ほとんどの人は言葉を発することができない。言いたいことがないのではない、それを言葉にできないのだ。この人たちが言いたいことを言葉にできるまで、長い長い時間がかかるだろう。今は自分も黙って、こういう人々と相対しているしかない」といったことを語っていました。私は、もう一度、Buri の sharp silence という言葉とそれを言った彼の表情を思い浮かべていました。

人の目が見てはいけないうものを見てしまった、人が経験してはいけないうことを経験してしまった、それでも生きていかなければならぬ—そのような人がたくさんいます。

ルワンダで、善良な普通の隣人であったはずの人々が牙をむいて襲いかかって、自分や自分の大切な人を傷つけるのを見た人。そういう人は、どうやって、その後、人間を信じていったらよいのでしょうか。同胞である人間を根本で信じることができずに、それでも生きていくことは、できるのでしょうか。

今の日本でも、震災や津波の被災地で、「ここは地獄だろうかと思った」というような経験をしてしまった人々が大勢います。

これらの人々に「元気を出せ」「希望を持って」と励ますことは、場合によっては、その励ましそのものが暴力的なものであるかもしれません。

キリスト教の信仰において、私たちは、神が歴史の始まりと終わりを支配している、と信じます。そのことは、私たち人間の知識も力もはるかに超えた神の大いなる力を信じることでありますが、それだけではないと思います。歴史の始まりと終わりが神の御手にある、ということは、人の世界は、善き世界から善き世界へと向かっている、ということでもあると思うのです。私たちが生きる今は、歴史の始まりと終わりとの間の、「中間の時」です。なるほど、私たちの「今」は、悲惨だらけです。人間自身がみずから作りだした、不要な悲惨があり、自然災害などで否応なく人間を襲ってくる悲惨があります。目の

前の世界を見れば、神の善き世界など、たわごとのように思えるかもしれません。

「中間の時」の歴史の中で、キリスト者の歩みもさまざまであったように思います。一方において、来たべき神の善き世界、いわば「あちら側の世界」だけに期待して、この世の悲惨からはできるだけ目をそらすような、そんな歩みもありました。しかし他方で、聖書のなかでその信仰の歩みが記されている人々、また歴史上にその信仰の歩みを残している人々の言葉や生涯を見ると、この世の悲惨にただ目をつぶっていたようには思えません。こういった人々は、この世の悲劇・悲惨の現実を見据えながらも、遠くに神の善き世界を仰ぎ見て、そこから力を得て、この世での歩みを続けていたように思えます。

在米時代に尊敬していたキリスト者の方が、「私たちの信仰は、…にもかかわらず信じる信仰だ」とおっしゃったことが、心に残っています。様々な悲惨にもかかわらず、今手元にあるわけではない遠くの希望を仰ぎ見て、「望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認する」。

希望のかけらも持つことができないほどに打ちのめされた人々が大勢いる、だからこそ、その方たちのためにも、遠くの希望を見失わず指し示すように生きていきたい、そう願います。

2016年6月24日 聖学院大学 全学礼拝